

私が書かない小説

田邊航

【あらすじ】

2025年秋、小説家の伊塚直人（42）は妻の杏菜（42）を癌で亡くす。文芸編集者の北原舜一（35）から、杏菜とのかつことを小説にしてみたらどうかと打診されるが、伊塚はその気になれない。杏菜の四十九日の法要の後、杏菜の妹・香澄（38）から、伊塚は杏菜を愛していなかったと責められるも、反論することができない。伊塚は他者に性的惹かれを感じないアセクシユアルであり、恋愛感情を持たないアロマンティックでもあることを自覚していた。伊塚は杏菜への後悔の念から、記憶を頼りに小説の執筆を始める。

1999年、高校一年の伊塚は、所属していたテニス部でのいわゆるホモソーシャルなノリになじめずにいたが、クラスメイトの杏菜から後押しされ、退部を選ぶ。その後、杏菜の勧めにより小説を書き始めた伊塚は、その小説を通じて杏菜との交流を深めていく。そんなある日、伊塚は同級生から杏菜と付き合い合っているのかとからかわれる。伊塚は杏菜との距離を置くようになるが、「友達」として大事な存在であることを確かめた二人は、以前のような関係を取り戻す。

2003年、東京の同じ大学に進学していた伊塚と杏菜は、所属するサークルの先輩・浅香淳之介（24）に気に入られ、三人で過ごす時間が増えていた。伊塚は、杏菜と浅香を同じように大切に思っていたが、やがて杏菜が浅香に想いを寄せ始めていることに気づき、不安を覚える。そしてある日、浅香が杏菜にキスをする場に居合わせた伊塚は、浅香に対し、浅香のしたことと杏菜が傷ついていると責め立てる。その後、浅香は突然大学を去り、悲しむ杏菜に伊塚は「好きだ」と告白する。

それこそが、伊塚の後悔の源だった。

2025年冬、伊塚は浅香と再会し当時の振る舞いを謝罪するが、浅香からは、伊塚の抱く後悔が間違いであると指摘される。

後日、伊塚は姪の莉乃（14）から、杏菜が生前語っていた伊塚の小説に対する評価を聞き、自身の本当の過ちに気づく。

一年後、伊塚は杏菜との関係を正直に記した私小説を発表し、杏菜に捧げる。

【登場人物表】

伊塚直人	(42)	(16)	(20)	小説家
伊塚杏菜	(42)	(16)	(20)	伊塚の妻
北原舜一	(35)	編集者		
浅香淳之介	(46)	(24)		伊塚の大学の先輩
向井香澄	(38)	(13)		杏菜の妹
向井晴子	(68)	(43)		杏菜の母
向井莉乃	(14)			伊塚の姪
向井恭	(10)			伊塚の甥
大友詩帆	(25)			Webメディア記者
宮木翔平	(20)			カメラマン
岡崎武史	(16)			伊塚の同級生
永井千明	(42)	(16)		伊塚の同級生
伊塚久雄	(42)			伊塚の父
深田信一	(32)			高校教師
横川英介	(17)			テニス部部員
岩田順平	(17)			テニス部部員
藤木裕太	(17)			テニス部部員
岡崎里美	(45)			岡崎の母
向井寿明	(45)			杏菜の父
藤島七海	(21)			伊塚の大学の先輩
山岸伸樹	(50)			伊塚のアパートの隣人
吉田美教	(23)			浅香の元恋人
小出健太	(25)			美教の友人
仲手川譲二	(60)			伊塚のアパートの大家

○ビジネスホテル・一室

薄暗い部屋、伊塚杏菜（37）、ベッドの上から天井を見つめる。

すぐ横には、寝息を立てている若い男の裸の背中。

杏菜、何かがこみ上げ、顔を手で覆う。

× × ×

杏菜、キャリーバッグに荷物を詰める。サイドテーブルに置かれたカバー付きの文庫本に気づき、バッグにしまう。ベッドではまだ男が眠っている。

杏菜「……行くね」

杏菜、部屋を出ていく。

サイドテーブルの下、プラスチック製の透明な葉が落ちている。

○同・表（早朝）

杏菜、ホテルを出て、大通りの方へと向かっていく。

○葬儀場・通夜会場（夜）

祭壇に飾られている、杏菜（42）の遺影。

北原舜一（35）、焼香を上げ、祭壇に手を合わせると、遺族席に振り向き一礼する。

遺族席、向井香澄（38）と向井晴子（68）、北原に礼を返す。

喪主席の伊塚直人（42）、虚ろな目でどこかを見ている。

北原「……」

○同・屋外喫煙所（夜）

北原、煙草を吸いながら電話している。北原「今出たところです。これから会社に戻ります……いえ、伊塚さんとは何も」

○同・通夜振る舞いの部屋（夜）

奥のテーブル、伊塚、一人で手酌で飲んでる。

北原の声「無理もないですよ。いくら癌の発見が遅れたからって……最後の何日かは、意識も戻らなかつたそうですし」

香澄、弔問客に酒を振る舞いながら、ふと伊塚のほうを見る。

伊塚、無心で飲み続けている。

香澄「（冷ややかに）……」

○同・告別式会場

伊塚、前に立ち、喪主挨拶をしている。

伊塚「……妻との、杏菜との出会いは……高校時代にまで遡ります」

伊塚、俯き、訥々と続ける。

伊塚「……思えば、二十年以上もの歳月を、ともに過ごしてきたことになりました」

× × ×
お別れの儀、伊塚、棺の中をぼんやりと見ている。

伊塚の声「私が、ものを書くとき、一番に読ませるのはいつも杏菜で」

伊塚、別れ花を棺に入れる。

続いて晴子、香澄、莉乃（14）、恭（10）、花を入れていく。

伊塚の声「彼女は、面倒に違いないその仕事を、文句も言わず引き受けてくれました」

○公道

末枯れの木々が並ぶ道、霊柩車が走る。

伊塚の声「私は、彼女が私の書く小説を、別段好んではないと知りながら」

○走行する霊柩車・中

位牌を抱えた伊塚、窓の外を何ともなく眺めている。

伊塚の声「それなのに、私は、彼女の時を無理やりに、奪い続けてきました」

○火葬場・中

棺が火葬炉に送られる。

伊塚、呆然とそれを見ている。

伊塚の声「こんなにも、彼女の人生がこんなにも短いのなら……私は、私は彼女に……」

○伊塚のマンション・外観

十数階ほどの高層マンション。

○同・リビング

自然光のみの薄暗い室内、北欧風のインテリアで統一された部屋。その一角、簡易仏壇だけが浮いている。小物の類は整頓されているが、家具周りには埃が溜まり、空気も澱んでいる。二人掛けのソファの端、伊塚、置物のように座っている。と、何かに呼ばれたように、ふいと窓のほうを向く。

○同・バルコニー

伊塚、手すりを掴み、下を覗き込む。地上四十メートルはある。伊塚、小さく息を吐き、手すりに足を掛けようとする。そのとき、部屋のほうでスマホが鳴る。伊塚、脚を掛けた状態で、スマホは鳴り続けている。伊塚、脚を下ろして。堪らず、その場にうずくまる。

○同・リビング

伊塚、電話をかけている。と、繋がって、北原の声「あ、伊塚さん、すみません」伊塚「ああいや……そうだこの前は、まともに挨拶もできなくてごめんよ」北原の声「いえ、とんでもないです」伊塚「……それで、どうしたの？」

○明潮社・文芸編集部

北原、デスクで通話している。

北原「あの、実は、伊塚さんに取材の申し入れがありました……」

伊塚の声「取材？」

北原「ええ。ニュースピーキーっていう、ウエブメディアなんですから……前作の『空は晴れていたか』についてで」

北原の手には、伊塚の著書『空は晴れていたか』の単行本。

伊塚の声「でもそれ、刊行したの半年も前だよね？」

北原「あー、伝えられてなかったんですけど、伊塚さんの『空は晴れていたか』、今ちょっと話題になってるんですよ」

伊塚の声「……どういうこと？」

北原「俳優の、窪田花蓮って知ってます？」

伊塚の声「名前だけなら……」
北原「その窪田花蓮が、自分のラジオでおすすめ本として紹介してくれて。ほら彼女、若者人気すごいじゃないですか。それで」

○伊塚のマンション・リビング

伊塚「……そうなんだ」

北原の声「すみません。今は取材なんて考えたくないですよ」

伊塚「……いや、受けるよ」

北原の声「え、いいんですか？」

伊塚「せっかくだからね。十年先の食い扶持を稼ぐには、若い読者を獲得しないと」

伊塚、冗談めかして笑う。

北原の声「……わかりました。では、先方にはすぐ返事しておきますね」

伊塚「うん、ありがとう。よろしく」

伊塚、電話を切る。顔を上げると、壁に飾られた写真が目に入る。

パリの街中、杏菜（30）の後ろ姿が写ったスナップ写真。

伊塚「（見つめ）……」

○喫茶店・店内

テーブル席、伊塚、記者の大友詩帆

(25) から取材を受けている。

北原と、カメラマンの宮木翔平(20)も同席している。

大友「伊塚さんの最新作『空は晴れていたか』は、長年の友人である二人の女性が、過去のある一日について、その日の空が晴れていたか曇天であったかで意見が食い違い、それを機にやがて決定的な断絶を迎えることになる、というのが粗筋としてあります」

伊塚「ええ。そうですね」

大友「まずこのお話は、どのようなことから着想されたのでしょうか」

伊塚「それは、以前別の作品で、色覚について取材したことがあるんです」

大友、前のめりで、

大友「ええ、ええ」

伊塚「(戸惑い)その中ですね、色覚に限らず、ものの見え方は、DNA配列といった先天的要因だけでなく、それを見ているときの心理量、脳の活動といった、後天的な要素でも違いが生まれる場合があります」という文献を目にしたところにあります」

大友「ええ、ええ」

伊塚「(やはり戸惑い)……」

北原、思わずふっとふき出して、

北原「……すみません」

大友「ええっと、それで……」

伊塚「ああ、それで、僕は少しだけ、救われたような気がして」

大友「ええ、ええ……救われたというのは？」

伊塚「はい、つまり……今、隣にいる人と、同じ物、同じ景色を目にしていたとしても、それを違ったふう捉えてしまうのは当然に起こりうることで、どちらかに欠陥があるわけではない。月並みな結論ですが、あらためて、そう思えたんです」

大友、うんうんと大きく頷き、

大友「……ああ、だから今作でも、最後までどちらの記憶が正しかったのかは明示されないんですね！」

伊塚「はい、まさに」

宮木「……ネタバレ」

大友「あ、大丈夫です。今のところは、記事では伏せるようにしますから」

北原「（笑い）そうですね、お願いします」

宮木「いや、そうじゃなくて。俺まだ、読んでなかったんで」

北原「……あー」

伊塚「（苦笑し）……」

大友「……ではまた話は変わりますが。今作に限らず、伊塚さんの作品は共通して、恋愛や登場人物の性を感じさせる描写が徹底的なまでに排除されている印象を受けます」

伊塚、表情をなくす。

北原「（気づき）……」

大友「あ、もちろんそれは、伊塚さんの作品の魅力だと、私は感じていました」

伊塚「……はあ」

大友「というのも、男性の作家が描く女性には、やはりその人の潜在的な願望、理想の女性像が、滲み出てしまうと思うんです」

伊塚「……」

大友「でもそれは、ときに女性の読者にとってはノイズにもなり得るわけです。もちろん、逆も然りですけど」

伊塚「……そうですね」

大友「だけど伊塚さんの作品は、そうしたことを感じさせる表現が一切なくて。読者を性別で選ばないんです」

伊塚「……」

大友「そういった点で、何か意識されていることはあるのでしょうか？」

大友、前のめりで構える。

伊塚「（無感情に）……」

大友「あー、ええっとー……」

北原「……伊塚さん？」

伊塚、ふっと笑って、

伊塚「それは、恐らく僕に作家としてそういうことを書く能力がない。ただそれだけのことです」

大友「……はあ」

伊塚「すみませんね、気の利いた答えができなくて」

大友「ええ、ええ……あ、そんなことは」

伊塚、苦笑する。

宮木、小さく溜息を漏らす。

大友「何？：宮木君」

宮木「いや、別に」

大友「（何か言いたげに）……」

北原、笑いを堪えている。

伊塚「（戸惑い）……」

○走行するタクシー・車内

後部座席、伊塚と北原、座っている。

北原、ふいに思い出し笑いをして、

北原「何だったんですか、さっきの」

伊塚「（笑い）やめてくれよ、北原君。取材中もずっとにやにやして」

北原「すみません（笑）でもだって、あれは仕方なくないですか」

伊塚「うん、まあ（笑）」

北原「ほらー。それにあの二人、なんか付き合ってる感じじゃありませんでした？」

伊塚「え？：なんで？」

北原「カメラマンの彼に仕事振ってあげてる年上彼女みたいな（笑）イメージですけど」

伊塚「（やんわりと）やめなさいよ。そういう邪推は」

北原「（笑いながら）はい、すみません」

伊塚「（苦笑し）……」

北原「（まだ笑い）……」

北原、ふいに真面目な顔をして、

北原「あの、伊塚さん」

伊塚「ん？」

北原「……いや、なんでもありません」

伊塚「なんだよ。気になるよ」

北原「はい……あの……伊塚さん。杏菜さんのこと、書かれてみてはどうですか？」

伊塚「……え？」

北原「これは何も、うちからとかそういうこ

とではなくて……ただ、そうすることが、
伊塚さんにとって良いような気がして」

伊塚「……」

北原「伊塚さん」

伊塚「悪いけど、そんな気にはなれないよ」

北原「……ですよね。すみません。余計なこと
と言いましたね」

伊塚「……」

○伊塚のマンション・エントランス（夕）

伊塚、帰ってくる。

郵便受けが溜まっているのに気づき、
開けて、入っていた物を確認する。

中には宅配便の不在票がある。

× × ×

伊塚、宅配ボックスを開ける。

大判サイズの薄い箱が入っている。

出して見ると、宛名は「Anna Izuka」

発送元は「えほんのビレッジ」とある。

○同・リビング（夕）

伊塚、箱を開ける。

中身は、フランス語の絵本で。表紙に
は『Si j'étais des chaussures（もし私が靴だ

ったら）』のタイトルと、靴を模した

愛らしいキャラクターが描かれている。

伊塚、ページを開く。

靴のキャラクターを履いた少女が地球

の上を歩いているイラスト。

『（フランス語で）もし私が靴だった

ら、あなたを世界のどこへでも連れて

行きます』というテキスト。

伊塚「……」

伊塚、ページをめくる。

ヒールのある靴のキャラクターを履い
た少女が、星空の下で少年とダンスを

踊っているイラスト。

『（フランス語で）もし私が靴だった
ら、あなたと共に密かな夜の中で踊り

続けます』というテキスト。

伊塚「（哀しく見つめ）……」

○同・杏菜の部屋（夜）

伊塚、絵本を手に入ってくる。
大きな本棚のある部屋。デスクの上にはノートパソコンや付箋の貼られた絵本、その他、絵本の出版企画書のプリントなどが所狭しと置かれている。
伊塚、ノートパソコンの上に、持ってきた絵本をそっと置く。

伊塚「（辺りを眺めて）……」

伊塚、部屋を後にする。

○海辺の町・全景

○寺院・墓地

伊塚家の墓前。納骨を済ませ、僧侶の読経を聞いている、喪服姿の伊塚、香澄、晴子、莉乃、恭。

○向井家・外観（夕）

木造二階建ての一軒家。

○同・居間（夕）

一同、テーブルを囲み食事している。
晴子「でもよかったわ。そちらの家のお墓がうちからもそう遠くなくて」

伊塚「……はい」

香澄「お母さん、それ何回言うの」

晴子「いいじゃない別に。ねえ直人さん」

伊塚「（俯き）……すみません」

晴子「？……直人さん？」

伊塚「ほんとに、良かったんですかね……やっぱり、杏菜さんは、向井家の墓に入れたかったんじゃないでしょうか」

香澄「……どういう意味ですか？」

伊塚「いや、それは……杏菜さん、うちの父親とも面識ないわけだし」

晴子「（笑って）やだ。何言ってるの。杏菜はもうとっくに、伊塚家の人間なんだから」

伊塚「…：そうですね」

と、聞いていた恭、にやにや笑って、
恭「イヅカケのインゲン？」

莉乃、舌打ちし、

莉乃「全然面白くないんだけど」

恭「は？莉乃に言っていないし」

莉乃「（無視し）…：」

恭「バカ！」

恭、莉乃の肩を叩く。

莉乃「（無感情に）いたーい。お母さん、恭
がぶったー」

香澄「もー、手出さないって約束したよね？」

恭「だって莉乃がむかつくから」

香澄「お姉ちゃんにむかつくなんて言わない」

莉乃「まじガキ」

恭「ガキじゃない！」

晴子「ほら。恭ちゃんも莉乃も喧嘩しない」

伊塚、困惑しながら眺めている。

と、固定電話が鳴る。

晴子「誰かしらね。こんな時間に」

晴子、子機を取って、

晴子「はい向井です。あーどうもー」

と部屋を出ていく。

恭、ふいに立ち上がり、

恭「トイレ！」

と駆け出ていく。

部屋の中は途端に静かになる。

香澄「…：そっか。直人さん、恭と会うのは
葬儀のときが初めてだった」

伊塚「そうですね。えっと、歳は」

香澄「10歳、にしては子どもっぽいけど」

伊塚「（苦笑し）あー」

莉乃「え、でも、私もだよね？」

香澄「何が？」

莉乃「おじさんと会うの。私もこの前が初め
てだった」

香澄「あ、そっか」

伊塚「ですかね…：」

香澄「家族で集まるときは、いつも直人さん、
来れなかったんですもんね。お仕事で」

伊塚「……すみません」
香澄「あー全然、嫌な意味じゃなくて」
伊塚「長いこと、そういう……杏菜がいると
きにはできなくて。すみません」
香澄「……」
莉乃「そうだ、おじさん。杏菜さんが昔使っ
てた部屋、今は私が使ってるんです」
伊塚「ああ。そうなんだ」
莉乃「見ていきます？」
伊塚「え？ああいや、いいよ」
莉乃「えー？……あ、私あれですよ？おじさ
んの小説、すごい読んでますよ」
伊塚「え？」
香澄「……」
伊塚「ああ……何だっけ。窪田花蓮だったっ
け。ラジオで紹介してくれたって」
莉乃「違います！あ、違うっていうか、私は
もつと前から読んでますから」
伊塚「（苦笑し）前からって。若い人には退
屈でしょ。ああいうのは」
莉乃「そんなことないです」
と、莉乃、恥ずかしそうに、
莉乃「……実は私も、小説書いてて」
伊塚「おー、そうなんだ」
莉乃「……なので、もしよければなんですけ
ど。お時間あるときでもいいんで、今度書い
たの、読んでもらってもいいですか？」
伊塚「あー……」
晴子「莉乃、直人さん忙しいから」
莉乃「わかってるけどー」
伊塚「まあ……アドバイスできるかはわから
ないけど。読むくらいなら、全然」
莉乃「ほんとですか？え、おじさんLINE
とかやっています？」
伊塚「ああうん」
莉乃「あ、待って。スマホ」
莉乃、慌ただしく部屋を出ていく。
香澄「……すみません。無理言って」
伊塚「ああいや……」

香澄「……」

○同・玄関（夜）

伊塚「土間の靴を履いて、

伊塚「すみません、長居してしまっ

晴子「またいらっしやいね」

伊塚「はい」

莉乃「小説、できたら連絡するんで。約束し

ましたからね？」

伊塚「（苦笑）わかったわかった」

晴子「ほら恭ちゃんも。おじさんに挨拶」

恭「……さよーなら」

莉乃「ほんとガキ」

恭「ガキじゃないし」

伊塚「（笑）」

と、ドアが開いて、

香澄「車、出しましたよ」

伊塚「あーありがとうございます。それじゃ

あ、お邪魔しました」

○走行する車・中（夜）

伊塚「香澄の運転する車の助手席に乗

っている。

伊塚「……そうだ。この前、杏菜の部屋に久

しぶりに入ったんです」

香澄「……」

伊塚「机の上なんかは、入院する前のままで。

仕事道具も出しっぱなしで」

香澄、黙っている。

伊塚「それで、形見分けとか、相談できてな

かったなって……そういうことに全然気が

回らなくて。すみません」

香澄「……」

伊塚「（気まずく）……」

香澄「……あの」

伊塚「はい」

香澄「直人さんって、お姉ちゃんのこと、別

に愛してなんてなかったんですよね？」

伊塚「……え？」

香澄「私、知ってますから」

伊塚「……知ってるって。何を？」

香澄「……」

伊塚「杏菜が、何か言ったの？」

香澄「……わかってるんじゃないですか？」

伊塚「……何を」

香澄「だって直人さん、直人さんは……お姉

ちゃんが望んだこと、一つでも叶えてあげ

たことありますか？」

伊塚「……」

○駅前ロータリー（夜）

香澄の車が路肩に停まる。

○停車中の車・中（夜）

香澄「……着きましたよ」

伊塚「……」

香澄「直人さん」

伊塚「（俯いて）……なんなんですか」

香澄「え？」

伊塚「……愛って、なんなんですか」

香澄「……」

伊塚、笑みを作り、

伊塚「すみません。ありがとうございます」と、会釈し、下りていく。

香澄「……」

○伊塚のマンション・リビング（夜）

伊塚、酒を飲みながら、テレビに流れる映画『風と共に去りぬ』をぼんやり眺めている。

画面の中で、レットがスカレットにキスをする。

伊塚、思わずリモコンで止め、ハードからディスクを取り出す。

○同・杏菜の部屋（夜）

伊塚、『風と共に去りぬ』のDVDパッケージを本棚に戻すと、その他に並んでいる本を何気なく眺める。

『江國香織』や『角田光代』『山田詠美』『山本文緒』など。

伊塚、何か見つけて、本棚から年季の入った一冊のB5ノートを抜き出す。表紙には『伊塚直人 第一短編集（1999）』と油性ペンで書かれている。

伊塚「（苦笑しく）……」

伊塚、ページを開く。

中には手書きの文章で、『その日、いつもと同じ時刻に仕事を終え』『一人暮らし家に帰った男は』『十年前に死んだ、姉の亡霊と遭遇した』など、短い小説になっている。

伊塚「……うわぁ」

ページの枠外には、別の筆記の文字で、『最後びっくりなんだけど！』『途中でまでジンとしてた時間返して（笑）』など、感想が書かれている。

伊塚「……」

伊塚、ページをめくる。

同様に、数十行の短い小説と、それへの感想が書かれている。

伊塚、懐かしく眺めながらページをめくっていく。

と、最後のページ。十数行の短い小説の後、『リクエスト…次は伊塚君が書く恋愛小説が読みたい！』とあり、

伊塚「（息を呑み）……」

そのコメントの横には、『ごめん、書けない』と記されていて。

伊塚「……」

○同・伊塚の部屋（夜）

伊塚、パソコンに向かっている。

画面には執筆ソフトの白紙のページ。

伊塚、天を仰ぎ、荒い息をする。

香澄の声「直人さんって、お姉ちゃんのこと、別に愛してなんてなかったんですよね？」

北原の声「伊塚さん、杏菜さんのこと、書かれてみてはどうですか？」

浅香（24）の声「お前、杏菜のこと、どう思ってるの」

香澄の声「だって直人さん、直人さんは……お姉ちゃんが望んだこと、一つでも叶えてあげたことありますか？」

伊塚「……」
目を閉じ、呼吸を整えて。

伊塚、キーボードを叩く。
画面に打ち込まれていくテキスト。

伊塚M「今ではもう、何もかもが煩わしくて堪らず、あなたの不在でさえ耳を破るような騒音を鳴らす始末だ」

伊塚M「私の頼りにならないかかりつけの医師は、あなたについて書くことこそが、この病を治す唯一の薬だと言った」

伊塚M「まったく疑わしい限りだが、もとより私は権威者に対して従順であるため、今これを書くに至っている」

伊塚M「断りを入れておくと、これから私が書こうとするのは恋愛小説ではない」

伊塚M「なぜなら私は」
そこで手が止まる。

伊塚「……」
伊塚、続きを打ち始める。

伊塚M「なぜなら私はただの一度も、あなたに、恋情を抱いたことなどないのだから」

○以下過去・鷹西高校・テニス部練習場

硬式テニスボールが宙に上がる。

伊塚（16）、サーブを打つ。

男子ダブルスの模擬試合。ペアの岡崎

武史（16）、ボレーミスをして。

審判「ゲームマッチ」

一同、集まって礼をする。

水飲み場。伊塚と岡崎、休んでいる。

岡崎「やっぱさあ、前衛は伊塚のほうが向いてるよ」

伊塚「え？」

岡崎「交代しようよ。ね？よくない？」

伊塚「ダメだよ。ペア決めたの先生じゃん」

岡崎「まずそれがおかしいんだよ。誰と組むとかどっちやるとか、なんで自分らで決められないわけ？」

伊塚「……それは、あれだけど」

岡崎「ていうか、スコートってスカートより

エロいよな。なんでだと思う？」

伊塚「え？」

岡崎、テニス部女子部員の練習風景を

眺めている。

伊塚「……知らないよ」

○同・テニス部部室(夕)

十数人の男子部員らが密集して過ごす中、二年の藤木裕太(17)、帰り支度を済ませて、

藤木「じゃ、おさきー」

と、出ていく。

横川英介(17)、ドアから外を覗き、

横川「うわ、あいつらやっぱ付き合ってたんだ」

岩田順平(17)、漫画を読みながら、

岩田「藤木と佐藤？」

横川「え、地味にシヨックなんですけどー」

岩田「てか佐藤ブスじゃん」

横川「や、顔は求めてない(笑)体よカラダ」

岩田「おっさんかよ(笑)」

横川と岩田、下品に笑う。

一年部員らも合わせて笑うが、伊塚は少し引き攣っている。

岩田「あれ。これ言ったっけ。こないだ彼女とカラオケ行ったとき、あいつらが個室でやっつてんの見たわ」

横川「まじ？入ってた？」

岩田「(笑い)おまえさあ」

横川「やっつてたの定義、重要だから」

岩田「顔ガチでこえーって」

横川「で？で？挿入は？してたの？」

岩田「いやさすがに（笑）でも藤木、佐藤に

あれいじられて、めっちゃキモい顔してた」

横川「（笑い）まじかよ、いいなー。佐藤の

手コキ……想像したら勃ってきたんだけど」

岩田「見せんな見せんな（笑）」

横川「……あ、一年きりーっつ。今勃起して

るやつ、罰金なー」

岩田「ほら一年。先輩命令」

一年部員ら、渋々立ち上がる。

伊塚も仕方なく立ち上がる。

横川、一人一人の股間を確認し、

横川「田中アウトー、須藤アウトー、岡崎も

アウトー……お、伊塚はセーフかー？」

と、伊塚の股間に手を伸ばす。

伊塚「（咄嗟に）ちょ、やめろよ！」

伊塚、横川の手をはじく。

横川「……あ？」

伊塚「……」

横川「え、何拒否ってんの？」

岩田「てか先輩にため口？」

伊塚「……すみません」

横川「はいダメー。伊塚君部室裏けてーい」

伊塚、横川と岩田に両腕を掴まれ、外

へ連れて行かれる。

○同・部室裏（夕）

服を汚し、生傷ができた伊塚、一人座

り込み、涙目でぶつぶつと呟いている。

杏菜の声「伊塚君？何泣いてんの？」

伊塚、顔を上げる。

校外の路上から、杏菜（16）、伊塚

を見下ろしている。

伊塚「……泣いてないし」

杏菜「いじめられた？」

伊塚「いじめられてないし」

伊塚、杏菜から顔を背ける。

杏菜「……かわいそうに」

伊塚「だから、」

杏菜「やめちゃえば？」

伊塚 「え？」
杏菜 「そんな顔になるとこ、居なくていいよ」
伊塚 「……」
杏菜 「じゃあね。また明日」
杏菜、去っていく。
伊塚 「（見つめ）……」

○同・職員室（別の日）

伊塚、教師の深田信一（32）にテニス部の退部届を提出する。

深田 「……理由は？」

伊塚 「言いたくありません」

深田 「言いたくないってお前……せっかく基礎練だって頑張ってきて、ようやく試合にも出られるようになったんだぞ？」

伊塚 「……そうですけど」

深田 「あれか。人間関係か」

伊塚 「……」

深田 「まあな。いろいろあるだろうけどな。

こういう場所で培うコミュニケーション能力っていうのが、のちのち社会に出たとき、お前の役に立つものなんだぞ？な？」

伊塚 「……いいです。要らないです」

深田 「ん？」

伊塚 「……あんなのが、ないといけない力なら、いいです。行かないです。社会なんて」
深田 「いやお前、行かないって……」

伊塚 「すみません。失礼します」

伊塚、礼をして出ていく。

○同・廊下

伊塚、出てくる。

扉の前、杏菜が立っている。

杏菜 「よくできました」

伊塚 「……うるさいよ」

二人、歩き出す。

杏菜 「伊塚君、途中負けそうになるから、あと少しで割って入るところだったよ」

伊塚 「（笑い）なんで。意味わかんないから」
杏菜 「（咳払いし）ええわたくし、伊塚直人

氏の代理人を務めるものですが」
伊塚「絶対やめて（笑）」

○路上（夕）

伊塚と杏菜、下校している。

伊塚「向井さん、部活は？なんだったけ」

杏菜「文芸部。今日は休みだけど」

伊塚「向井さん何か書くの？」

杏菜「書かない。書く人もいるけど、読む専門。私は」

伊塚「ふーん。それもありなんだ」

杏菜「うん。だって、書く人と読む人、両方

いないと成り立たない世界だから」

伊塚「世界（笑）書く人だって読めるじゃん」

杏菜「伊塚君、わかってない。書く人はね、プロの作品ならともかく、隣の素人が書いたものなんて好んで読みたがらないから」

伊塚「へー、そういうもの？」

杏菜「その昔、部員同士で互いの作品を貶し合って、最後には死傷者が出たという……」

伊塚「え？」

杏菜「冗談ね」

伊塚「……」

杏菜「…… × × ×
「そしたら伊塚君。これから暇じゃん」

伊塚「あー。たしかに」

杏菜「スカウトしようか。文芸部に」

伊塚「やだよ、そんな物騒な集団」

杏菜「だからさっきのは冗談だって（笑）」

伊塚「（笑い）てか、本とか読まないし」

杏菜「じゃあ、書けば？」

伊塚「読まないんだから、書けないよ」

杏菜「えー、でも私、伊塚君は書けると思う。文才あるから」

伊塚「いやいや、何を根拠に」

杏菜「え、学級日誌」

伊塚「え？」

杏菜「伊塚君のはね、情景が浮かぶっていうか。一日の出来事を淡々と書いてるだけに、なんか面白くて。続きが読みたい」

て思うの、伊塚君の文章だけだよ」

伊塚「……そんなの、意識したことないよ」

杏菜「それがね、才能なんだよ」

伊塚「やめて。その気になっちゃうから」

杏菜、ふっと笑い、

杏菜「これがプロのスカウトマンの腕よ」

伊塚「危なっ。ほいほい付いてくところだった」

杏菜「（笑い）悪徳事務所じゃないんだけど」

伊塚「（笑）」

○伊塚の実家・表（夜）

住宅街、木造二階建ての一軒家。

○同・台所（夜）

父・久雄（42）、魚を焼いている。

伊塚、入ってきて、食器棚を開ける。

中には三個の茶碗がある。

伊塚、そのうちの二個を取り出し、炊

飯器からご飯をよそう。

○同・居間（夜）

伊塚と久雄、夕飯を食べている。

伊塚「そうだ今日、部活辞めてきた」

久雄「え？」

伊塚「ごめん」

久雄「いや、俺は別に」

伊塚「……」

久雄「自分で決めたんなら、いいよ」

伊塚「うん」

久雄「それに、どっちかというと母さんだろ。

テニスは」

伊塚「……うん」

久雄「母さんには、話したの？」

伊塚「ううん」

久雄「そうか」

伊塚「というか前も言ったけど、連絡とって

ないからね。僕も」

久雄「……ああ。そうか」

伊塚「うん」

○同・伊塚の部屋（夜）

伊塚、ベッドに寝転がり、考え事をしている。

と、ふいに起き上がり、机に向かう。机の上には新品のB5ノートがある。

伊塚、ノートを開いて、

伊塚「（考え込み）……」

シャーペンを取り、書き出す。

○鷹西高校・教室（朝）

伊塚、入ってくる。

本を読む杏菜の席に向かっていき、

伊塚「向井さん」

杏菜「（顔を上げ）ああ。伊塚君。おはよう」

伊塚「これ、書いてきた」

と、鞆からノートを出して渡す。

杏菜、開いて見る。

杏菜「小説？ほんとに書いたの？」

伊塚「……うまく書けてるか自信ないけど」

杏菜「自信ない人は、人に見せないよ（笑）」

伊塚「……もしよかったらなんだけど、向井

さん、読んでくれない？」

杏菜「いいの？」

伊塚「うん」

杏菜「じゃあ、後で読むね」

杏菜、ノートを机にしまう。

伊塚「……うん」

× × ×

終業のチャイムが鳴る。

伊塚、帰り支度をしている。

杏菜、やって来て、

杏菜「伊塚君、読んだよ」

とノートを渡す。

伊塚「もう？」

杏菜「数学の時間ね」

伊塚「（笑い）ああ。どうだった？」

杏菜「感想、中に書いちゃった」

伊塚「え？」

杏菜「あ、ごめん。勝手に」

伊塚「ううん。全然いいけど」

と、ノートを開く。ページの枠外にコメントが記されている。

杏菜「やっぱり伊塚君、才能あるよ」

伊塚「出た、悪徳スカウトマン」

杏菜「（笑い）ほんとほんと。普通に面白い」

伊塚「なんだー普通かー」

杏菜「え？私が言うんだよ？」

伊塚「なにそれ（笑）」

杏菜「超読書家の私が言う普通は、イコール

才能大ありってことだから」

伊塚「：：ああ、はいはい」

杏菜「なに？不満？」

伊塚「いやー、でも、普通は超えたいじゃん」

杏菜「（笑い）えー生意気ー」

伊塚「（笑）」

杏菜「じゃあ、それちょっと貸して」

伊塚「え？」

杏菜、伊塚のノートを奪い、

杏菜「ペンある？ペン」

伊塚「あるけど」

と、伊塚、机から油性ペンを出す。

杏菜、ペンでノートの表紙に『伊塚直人 第一短編集（1999）』と書く。

杏菜「（笑顔で）はい」

と、ノートを返す。

伊塚「はいつて：：」

伊塚、杏菜の書いた表紙の題を見て、困惑しながらも少し嬉しい。

○伊塚の実家・伊塚の部屋（夜）

伊塚、机に向かい、ノートに小説を書きつける。

○鷹西高校・教室

授業中。壁の日めくりカレンダーは

『1999年11月11日』

伊塚、さり気なく杏菜を盗み見る。

杏菜、伊塚のノートを読みながら、ふっとふき出す。

伊塚、満足げにほくそ笑む。

× × ×
カレンダーは『2000年1月1日』
伊塚、杏菜から渡されたノートをばら
ばらとめくっていく。
半分以上のページが埋まっている。
伊塚、杏菜の感想を読みながら、笑み
をこぼす。
× × ×
カレンダーは『2000年2月14日』
伊塚と杏菜、連れ立ち教室を出ていく。
そんな二人を見て、他の生徒らはひそ
ひそと何か囁く。

○書店・表

商店街、町の小さな本屋。
伊塚と杏菜、入っていく。

○同・店内

文具コーナー。伊塚、商品棚に並んで
いる葉を手に取り、物色している。
ふと振り向くと、小説コーナーで熱心
に本を読みこむ杏菜が見える。

× × ×
伊塚、杏菜の後ろから、

伊塚「なにそれ」
と覗き込む。

杏菜「んーあんまわかんない」
と、書棚に戻す。それは『冷静と情熱
のあいだ Rosso』の単行本で。

伊塚「……？」

杏菜、伊塚に顔を向けられないよう、ぶら
ぶらと歩いていく。

伊塚「（わからず）……」

○路上（夕）

伊塚と杏菜、歩いている。

杏菜「……そうだ」

杏菜、歩きながら鞆を漁り、ラッピン
グされたカップケーキを出して、

杏菜「これね、妹と一緒に作ったんだけど」
伊塚「え、くれるの？」

杏菜「うん」

伊塚「ありがとう」

伊塚、受け取り、鞆にしまう。

杏菜「……一応今日、バレンタインだから」

伊塚「え？……」

杏菜「……迷惑だった？」

伊塚「いや……嬉しいよ。普通に」

杏菜「……普通かい」

伊塚「あ、じゃなくて。だってほら、僕って、

カップケーキ大好き人間じゃない？」

杏菜「（笑い）聞いたことないけど」

伊塚「ああじゃあ良かったね。新しい僕を知

れたね」

杏菜「うっざ（笑い）」

伊塚「（笑い）……」

○伊塚の実家・伊塚の部屋（夜）

伊塚、机に向かい、ノートを開く。

最後のページで。そこに書かれている

杏菜の『リクエスト』を目にして、

伊塚「……」

伊塚、狼狽えて、息を乱す。

○鷹西高校・2-1教室・前（朝）

○同・中（朝）

朝礼前の賑やかな教室。壁のカレンダー
1の日付は『2000年4月6日』

伊塚、自席で本を読んでいる。

後方の離れた席には、杏菜もいる。

と、岡崎、伊塚のもとにやって来て、

岡崎「伊塚ーよかったなー」

伊塚「（顔を上げ）何が？」

岡崎「またまたー。向井さんとクラス一緒に、

内心喜んでるくせにー」

伊塚「え、だから？」

岡崎「うーわ。否定しないってことはー？」

伊塚「普通に嬉しいけど。何なの？」

岡崎「じゃあやっぱほんとなんだー。伊塚と向井さん、付き合ってるって」

伊塚「……は？」

岡崎「いや、みんな知ってるからね？」

伊塚「……」

伊塚、他の生徒らの視線を感じる。

杏菜はじっと俯いている。

岡崎「だって伊塚、テニス部辞めてから向井さんにべったりじゃん」

伊塚「（苛つき）え、なんでそうなるの？」

岡崎、伊塚の耳元で、

岡崎「ここの話、どこまでいったの？」

伊塚「……」

岡崎、にやにや笑っている。

伊塚「……キモ」

岡崎「は？」

伊塚「お前、まじでキモいんだけど」

伊塚、席を立ち、出て行こうとする。

岡崎、伊塚を追いかけて、

岡崎「逃げんなよお」と、腕を掴む。

伊塚「……離せよ！」

伊塚、岡崎を突き飛ばす。

岡崎、勢いで机に頭を打って、

岡崎「……」

伊塚「……」

岡崎、頭を手で押さえる。

血のしずくが床に落ちる。

騒然となる生徒ら。

伊塚、動揺し、振り向く。

杏菜と目が合う。

杏菜、すぐに目を伏せる。

伊塚「……」

○市民病院・診察室前

伊塚と深田、ベンチに座っている。

診察室のドアが開き、頭にガーゼを貼

った岡崎と、岡崎の母・里美（45）が出てくる。

伊塚と深田、立ち上がる。

深田「いかがでしたか？」
里美「ああもう何とも。ちょっと切っちゃっただけみたいで」

深田「いやー良かったです」

岡崎、気まずく俯いている。

深田、伊塚の背中を叩いて、

深田「ほら伊塚」

伊塚「……すみませんでした」

伊塚、頭を下げる。

岡崎「……俺もごめん。ごめんなさい」

岡崎、頭を下げる。

伊塚「（項垂れたまま）……」

○鷹西高校・教室

カレンダーは『2000年7月20日』

黒板には『夏休みスタート』の文字。

伊塚、帰り支度をして、席を立つ。

自席で永井千明（17）とおしゃべり

している杏菜の横を素通りし、教室を

出ていく。

杏菜「（目で追い）……」

○海辺の町・路上（夜）

掲示板には花火大会のポスター、見物

客で混雑している歩道で、伊塚、歩行

者誘導のアルバイトをしている。

伊塚「立ち止まらないでください。ご協力

お願いします」

伊塚、通り過ぎていくカップルや家族

連れを、虚しい目で見送る。

杏菜の声「伊塚君？」

伊塚、振り向くと、浴衣を着た杏菜が

立っている。

伊塚「……」

杏菜の先には、晴子（43）、香澄

（13）、父の寿明（45）が立ち止

まり待っている。

杏菜「アルバイト？」

伊塚「……うん」

杏菜「ねえ、伊塚君、」

伊塚「立ち止まらないうでください」

杏菜「え？」

伊塚「道、立ち止まらないうでください。ご協力お願いします」

杏菜「……ごめん」

杏菜、家族のもとへ駆けていく。

伊塚、杏菜を目で追って、こちらを向いている香澄と視線が合う。

伊塚「……」

伊塚、目を逸らす。

杏菜、家族と共に去っていく。

伊塚「……立ち止まらないうでください。ご協力お願いします」

伊塚、無心に声をあげる。

○鷹西高校・教室

授業中。日めぐりカレンダーの日付は

『2000年9月4日』

杏菜、伊塚の背中を見つめる。

○路上

伊塚、一人で下校している。

と、杏菜、駆けてきて、

杏菜「伊塚君」

伊塚、立ち止まり振り向いて、

伊塚「……！」

前を向き、また歩き出す。

杏菜、追い付き、並んで歩いて、

杏菜「私、ちょっとわかんないんだけど。伊塚君、なんでずっと避けるの？」

伊塚「え？……避けてないけど」

杏菜「いや、それは無理ある（笑）」

伊塚「（笑い）……」

杏菜「岡崎君に、言われたから？」

伊塚「……」

杏菜「私が、あんなこと書いたから？」

伊塚「……」

杏菜「リクエストなんかしたから？」

伊塚「違うよ」

杏菜「じゃあなんで？」

伊塚「……」

伊塚、足を止める。

杏菜「伊塚君？」

伊塚「（俯き）……思わなかったから」

杏菜「え？」

伊塚「……僕はね、向井さんといるときが、話してるときが、一番嫌なことがなくて、

自分っぽくいられて。だから、そうしてるだけなのに。だけだったのに」

杏菜「……うん」

伊塚「でもね、そうなるよね。傍から見たら、そういうふうに思われても仕方ないんだって。今さらだけど、気づいたんだよね」

杏菜「……」

伊塚「自分はね、人の、そういうのを見たり、聞いたりするのは、嫌だなんて思うこともあるのに。僕も、そういうふうに見られてるんだって思ったら、なんか……」

杏菜「……」

伊塚「本当は、そうじゃないのに。ないから。なおさらね、どうしたらいいか、わかんなくて。わかんなくなってる……」

杏菜「……そっか」

伊塚「うん……」

杏菜、笑って、

杏菜「そっかそっか。そんなことか」

伊塚「そんなことって」

杏菜「だって、そんなの考えなくてもよくな
い？」

伊塚「え？」

杏菜「伊塚君が私のこと、どう思ってるかなんて。他の人に邪推されても、そんなの全然、何の問題にもならないよ」

伊塚「……」

杏菜「（笑い）えー、てかなんか私、告つてもないのに振られてるんだけど」

伊塚「いや、そういうんじゃないよ、」

杏菜「同じだよ」

伊塚「え？」

杏菜「私も、同じだから」

伊塚「……ほんとに？」

杏菜「待って恐い。自意識過剰じゃん」

伊塚「（笑い）やめてよ」

杏菜「だからね、変えるのもやめてよ」

伊塚「え」

杏菜「前みたいにいようよ。ね？」

伊塚「ほっとし、泣きそうで、」

伊塚「……うん」

杏菜「よし。帰ろ帰ろ」

杏菜、歩き出す。

伊塚、追いかけて、

伊塚「あ、そうだ」

と、鞆を漁り、くしゃくしゃになった

手のひらサイズの紙の包みを出して、

伊塚「これ、あげる」

杏菜「えーなに？」

伊塚「前一緒に、本屋さん行ったでしょ？」

杏菜「だいぶ前だけど」

伊塚「そのとき、向井さんにと買って買った

んだけど。渡すタイミング、なくて」

杏菜、袋を開ける。入っていたのは、

プラスチック製の透明な葉で。

伊塚「ほら僕、向井さんのおかげで小説書き

始めて。それが、すごく楽しくて。だから、

お礼しなくちゃって、あのとき思ってた」

杏菜「……ありがとう」

伊塚「あー、あんまりな感じだ（笑）」

杏菜「そんなことない」

伊塚「（笑い）えー？」

杏菜「嬉しい。すごく嬉しい。大事にする」

伊塚「……うん」

杏菜、葉を空に透かして見る。

伊塚（42）M「もしも、このとき私が、意

地でもあなたを拒んでいれば」

伊塚、隣を歩く杏菜を見て、安堵の表

情を浮かべている。

伊塚M「後に私を蝕む、私自身の厄介で醜悪

なその心を、予見することができたなら」

○現在・伊塚のマンション・伊塚の部屋（夜）

伊塚、キーボードを叩く。
伊塚 M 「けれど、その後悔でさえ、あなたのためだけにはできないでいる」
伊塚、手を止めて。書いた文章を虚しく見つめる。

○同・表（別の日）
インターフォンが鳴る。

○同・玄関
伊塚、ドアを開ける。
前に立っていた千明（42）、薄く微笑んで、
千明 「……久しぶり」
伊塚 「……うん。あ、どうぞ」
伊塚、千明を中に入れる。

○同・リビング
千明、簡易仏壇の線香を上げる。
伊塚、奥のキッチンでケーキを取り分けている。
千明、振り向いて、
千明 「葬儀、出られなくてごめん」
伊塚 「いや……急なことだったし」
千明 「病気のこと知らなくて。去年来たときは、杏菜、全然元気だったから」
伊塚 「……うん。そのときはまだ。癌の進行がね、早かったんだよ」
伊塚、ケーキをテーブルに運ぶ。
伊塚 「永井さん、紅茶でいいかな」
千明 「ああごめん。ありがとう」
伊塚、キッチンに戻り紅茶を準備する。
千明、壁に飾られているパリでの杏菜の写真に目を留めて、

千明 「この写真、私が撮ったやつ」
伊塚 「ああ」
千明 「懐かしいな。パリで撮ってるってことは、杏菜が初めて来たときだ」
伊塚 「十年前とかだよ」
千明 「うん、私が結婚して、向こうに行って

次の年だから。十二年前かな」
伊塚「それから紅茶を運んできて、話になりました」
伊塚「それからは毎年だもんね。杏菜がお世話になりまして」
千明「世話なんて。私が寂しくて、無理やり呼んでただけ：あ、ありがとう」
千明と伊塚、テーブルにつき、
千明「いただきます」
伊塚「いただきます」
二人、ケーキを食べ始める。
千明「でもそうか、杏菜とは毎年会ってたけど、伊塚君とはいつぶり？高校以来？」
伊塚「そうなるね。写真では見てたから、そんな感じもしないけど」
千明「私も。杏菜がよく、伊塚君の写真、送ってきてたから」
伊塚「え？なんの写真？」
千明「んー、なんていうか、いろいろ」
伊塚「いろいろ」
千明「うん、いろいろ（笑）」
伊塚「（わからず）：：：」
千明、ふっと笑い、
千明「杏菜にはよく言ったけど、私、杏菜と伊塚君が結婚するなんて、思わなかったよ」
伊塚「え？」
千明「高校の時、みんな二人が付き合ってるって噂してたけど。私はなんか、そういうんじゃないんだろうなって、思ってたから」
伊塚「：：：」
千明「ごめん、嫌なこと言った？」
伊塚「ううん。でもね、いや、でもっていうのも変なんだけど：：：杏菜に、永井さんみたいな人がいて、良かったと思ってる」
千明「なにそれ（笑）」
伊塚「いや、なんていうか：：：」
千明「：：：？」
伊塚「普段はね、ワーカホリックの気があるくらいなのに。毎年フランスに、永井さんとこに行くのだけは、楽しみにしてて。なんとか七日間、連続で休暇を作ったりして」

千明「……七日間？」

伊塚「うん。丸々七日。仕事終わりそのまま空港に向かって。それで、七日目に帰国したら、次の日にはもう仕事に行って」

千明「（首を傾げ）……」

伊塚「え？」

千明「ううん。でも杏菜、ここ何年かは三日間だけだったから。こっちに滞在するの」

伊塚「……三日？」

千明「うん。五年くらい前からかな。仕事、忙しいからって。二泊で帰るようになって」

伊塚「……」

千明「（何か勘繰り）……たぶん、ほんとにどっかで仕事してたんだよ。嘘じゃなくさ、気を遣わせたくなかったんだよ」

伊塚「……どうだろう」

千明「きつとそうだよ。ね？」

伊塚「……」

伊塚、食べかけのケーキに目を落とし、じつと何かを考え込む。

○以下過去・ダイニングバー・店内（夜）

浅香淳之介（24）、伊塚（20）と

杏菜（20）のいるテーブルに向かい、浅香「伊塚！ハッピーバースデー！」

と、ホールケーキの載った皿を置く。

ケーキには「祝・20才」のプレート。

杏菜「やったー、直人おめでとー！」

伊塚「いや食えないでしょ。こんなに」

浅香「大丈夫。お前はもう大人だ」

伊塚「年齢関係ないし！」

杏菜「大人の世界にようこそ」

伊塚「杏菜もついこの前じゃん」

浅香「そうだ、乾杯しよう」

伊塚「え、何回目ですか、」

浅香「はいかんばしい！」

伊塚「（笑い）えー」

三人、グラスをぶつける。

伊塚M「東京の、同じ大学に進学した私たちは、少し風変わりな先輩に気に入られた」

○東蘭大学・キャンパス（一年前）

学園祭、屋外ステージの上、ピエロの扮装をした浅香、ポールジャグリングを披露している。

観客の中、学生服を着た伊塚（18）と杏菜（18）、浅香のパフォーマンスに見入っている。

○居酒屋・座敷（夜）（一年前）

新歓の飲み会、伊塚と杏菜、藤島七海（21）と談笑している。

藤島「君たち浅香さんに憧れてきたの？」

伊塚「はい。去年の学祭で。ステージを見て」

杏菜「もし蘭大に入れたら、大道芸サークルがいいねって。二人で話してて」

藤島「なに、そこ付き合ってたの？」

伊塚「いえ。違います」

藤島「あっそう。でもねー、あの人、ステージ降りたらダメ人間だから。気をつけなね。特に女子」

そこに浅香、なだれ込んできて、

浅香「なににににー？俺の話したー？」

藤島「はい。うちには永遠の三回生で、女た

らしのクズがいるっていう話を」

浅香「いいねえ。危険な男って感じ？」

藤島「ね。すでにいろいろ漂ってるでしょ？」

杏菜「（笑い）はい」

伊塚「（笑い）……」

浅香「まあまあ。とにかくようこそ。我が大道芸サークルへ」

浅香、人懐こい顔をして笑う。

○戻って、ダイニングバー・表（夜）

浅香と伊塚、杏菜、店から出てくる。

浅香「ボウリング、オア、カラオケー」

伊塚「えー」

浅香「オーケイレッツゴー、ボウリング！」

伊塚「聞く気ないじゃないですかー」

杏菜「アプルーブ、ボウリング、イエーイ！」

伊塚「（笑い）杏菜もー」
三人、ハイテンションで歩いていく。

○ボウリング場・中（夜）

浅香たち、受付に向かう。
先にいたグループの数人が、ちらちらと浅香を見て何か囁く。

伊塚「（気になり）……知り合いですか？」
浅香「んー？」

と、吉田美教（23）と小出健太（25）、やって来て、

美教「淳之介」

浅香「……おー、美教じゃん」

美教「おーじゃないし」

浅香「（笑い）いや、まさかこんな早く再会できるとか。やっぱ俺たち運命じゃん」

小出、浅香に詰め寄って、

小出「てめえ」

美教「（小出に）ねえ、いいって」

小出「……」

美教、杏菜を見やり、

美教「その子、何番目の女？」

と、嫌味っぽく笑う。

浅香「え？ああ違うよ。この子は」

美教「（無視し）この男、平気で五股かける

ようなクソ野郎だからね。知ってる？」

杏菜「……」

浅香「えー、でもさあ、それでも良いって言

ったの、美教だよ？」

美教「だってそれは、そんな中でも、私が一番

だと思ったから！」

浅香「（へらへらと）だから俺はね、付き合

ってる子に順位付けるなんて、そんな不誠

実なことしないよ」

伊塚「（呆れ）……」

小出、浅香の胸ぐらを掴んで、

小出「てめえ、いい加減にしろよ？美教泣か

せて、ただじゃ置かねえかな？」

浅香「いや、ていうかお前誰だよ（笑）」

小出「ああ？……」

張り詰めた空気の中、杏菜、ふいに笑い出して。一同、杏菜を見る。

杏菜「すごい。ほんとに言うんだ。ただじゃ置かねえ、だって」

小出「（恥ずかしく）……」

美教「（杏菜に）なにあんた。やば」

杏菜「うちの先輩が、どうもご迷惑おかけしました」

杏菜、わざとらしく頭を下げる。

浅香「（戸惑い）……」

杏菜「ということで、これにて解散！」

と、くるりと背を向け、去っていく。

伊塚と浅香、慌てて杏菜の後を追う。

○路上（夜）

三人、白けた様子で歩いている。

浅香「なんかごめんな（笑）変なことに巻き込んでしまった」

伊塚「いや、初めてじゃないですか」

浅香「そうだった」

杏菜「……そうですよ」

伊塚、杏菜を見る。

杏菜、暗く俯いている。

伊塚「（気になり）……」

浅香「あーあ。なんでかな。初めはうまくやれてんのに。いつも最後には憎まれてんの」

伊塚「……」

浅香「付き合いが長くなるほど、みーんな、結婚がどうか、子どもは何人でーとか、俺との将来を語り出すわけ」

伊塚「……わかんないですけど。当然なんじゃないですか？」

浅香「ええ？」

伊塚「だって、恋愛の、一応の帰着は、結婚ってことになるんじゃないんですか？」

浅香「でもそれはさあ、自分の人生における保証がほしいだけで。そんなのはもう、愛じゃないだろ？」

杏菜「……」

伊塚「なんですかそれ。酔いすぎですよ」

浅香「（笑い）そうね、わたし酔ってるわ」

浅香、伊塚にしな垂れかかる。

伊塚「（笑い）ねえ、キモいですよ」

伊塚、浅香を振り払う。

浅香「（笑いながら）俺はねー、彼女らがその時そこにただ居てくれるだけで、満足なの。幸せなの。他はなーんも望まない。それこそが本当の愛なわけ。Do you understand?」

伊塚「いや……」

杏菜「……」

○走行する電車・中（夜）

三人、並んで座っている。会話はない。

○路上（深夜）

三人、無言で歩いている。

と、杏菜、ふいに立ち止まる。

伊塚も、足を止めて、

伊塚「……杏菜？」

浅香、足を止めて、

浅香「どうした？疲れちゃった？」

杏菜の顔を覗きこむ。

すると杏菜、浅香を見て、

杏菜「……浅香さんは、穴ぼこだらけなんですよ」

浅香「（笑い）穴ぼこ？」

伊塚「……」

杏菜「人って、誰でもみんな、何かしらの欠如があるもので。その足りない部分を他人で埋めようとする行為が、愛というか、恋愛だと思うんです」

浅香「ほう」

杏菜「浅香さんは、その穴が大きすぎるから。一人分なんかじゃ埋まんないくらい、大きいから。そうやって何人も利用するしかないんです。悲しいですね。可哀想な人ですね。浅香さんは」

浅香「……」

伊塚「杏菜。もういいよ」

杏菜「何？もういいって」

伊塚「穴ぼことか、欠如とか。そういうの、人に使っちゃダメだよ。良くないよ」

杏菜「…：そうだね。ごめんなさい」

杏菜、浅香に頭を下げる。

浅香「いや、杏菜の言うとおりだから」

杏菜「ううん…：でもこれも、一つの考え方だから。どれが本当の愛とか、愛じゃないとか言うのは、違うと思うんです」

浅香「…：そうね。うん。悪かったよ」

杏菜、少し表情を緩めて。歩き出す。

浅香、伊塚に照れ笑いを見せて、杏菜の後に続いていく。

伊塚、ほっとしながらも、

伊塚「（何か不安で）…：」

○杏菜のマンション・表（深夜）

杏菜、浅香に向き直り、

杏菜「すみません。最後なんか絡んじやって」

浅香「（笑い）だからー、悪いのは俺だから」

杏菜「はい、それはそうですけど」

浅香「お前（笑い）」

伊塚「（笑い）」

杏菜「あ、そうだ。直人誕生日おめでとー」

伊塚「だから何回目（笑い）」

杏菜「（笑い）じゃ。おやすみなさい」

浅香「おう。おやすみ」

伊塚「おやすみなさい」

杏菜、マンションに入っていく。

○伊塚と浅香のアパート・二階通路（深夜）

伊塚と浅香、階段を上がってくる。

伊塚「てか、なんでこっち来るんですかー」

浅香「いいじゃんかよ。泊めろよ」

伊塚「意味わかんないです。浅香さんすぐ下じゃないですか」

浅香「人肌恋しい夜なんだよ」

伊塚「（笑い）何言ってるんですかー」

伊塚、部屋の前で鍵を探す。

と、隣の部屋のドアが開き、山岸伸樹（50）、顔を出して、

山岸「うっせえんだよ！何時だと思ってるんだ」
山岸、ワンカップ酒を片手に、その目は据わっている。

伊塚「すみません」

山岸「……ぶっ殺すぞ」

山岸、部屋に戻っていく。

伊塚と浅香、顔を見合わせ笑う。

○同・伊塚の部屋（深夜）

伊塚、浴室から出てくる。

伊塚「浅香さん、シャワー浴びます？」

浅香、本棚を物色している。

浅香「伊塚は、小説が好きなんだなあ」

伊塚「まあはい。高校からですけど」

浅香「ふーん」

伊塚「浅香さんは？」

浅香「俺はあんまりだな。小説は」

浅香、床に寝そべる。

伊塚「ベッド、いいですよ」

浅香「いいって。優しいなあ、君は」

伊塚「……じゃあ、電気消しますよ」

浅香「ああ」

伊塚、消灯し、ベッドに寝そべる。

浅香「……あ、でも」

伊塚「え？」

浅香「小説も、好きなのはある」

伊塚「何ですか」

浅香「……人間は、恋と革命のために生まれてきたのだ」

伊塚「太宰治。斜陽ですか」

浅香「正解。さすが」

伊塚「まあ、有名ですから」

浅香「そうなの？俺、読んだことはないから」

伊塚「何ですかそれ（笑）」

浅香「でも、その言葉は好きなんだよな」

伊塚「……知ってます？それ、もとは太宰の

言葉じゃないですかね」

浅香「え？」

伊塚「愛人の日記から、取ったんですよ」

浅香「まじかよ。やばいな太宰。たぶん俺、

好きだわ」

伊塚「（笑い）……寝ませんか？」

浅香「お前はさあ」

伊塚「ねー（笑）」

浅香「お前、杏菜のこと、どう思ってたんの？」

伊塚「……え？」

浅香「いや、今のは無し。おやすみ」

伊塚「……おやすみなさい」

伊塚「……目を瞑り、

目を開けて、

伊塚「……」

伊塚「……僕、無いですよね」

浅香「え？」

伊塚「よくそうやって、付き合ってたのーと

か、好きなんじゃないのーとか、聞かれた

りしますけど。そういうの、無いです」

浅香「……無いつて？」

伊塚「まだとか、わからないとかじゃなくて。

いや、わからないはわからないんですけど。

でも、自分では、無いつてことが、なんと

なくわかるんです」

浅香「……」

伊塚「だから、太宰は嫌いです。人間は、恋

と革命のために生まれてきたのだから、は

あ？つて感じですよ（笑）」

浅香「……そういうこと、杏菜には？」

伊塚「別に言いませんよ（笑）人に話すのだ

って、浅香さんが初めてなんで」

浅香「……そうか」

伊塚「はい」

浅香「じゃあさ、気分悪いんじゃない？俺と

いると」

伊塚「まあ、そういうときもありますけど」

浅香「あるんかい（笑）」

伊塚「（笑い）……でも、昔ほどは嫌悪感と

かなくて。人のそういうのは、特に何も思

わないんで」

浅香「ふーん……」

伊塚「それに前は、杏菜がいればそれで全然

良かったんですけど。今は、浅香さんがいて、杏菜がいて、三人が割と良かったりするんです」

浅香「……」

浅香、起き上がり、伊塚を見る。

伊塚「……なんですか？」

浅香「お前、明日になったら絶対はずいよ」

伊塚「あー（笑）」

浅香「はずいはずい。寝よ寝よ」

浅香、横になり、背を向ける。

伊塚「今の無しですから！忘れてください」

浅香「（目を閉じたまま）無理ー」

伊塚「もー」

伊塚、笑って。やがて目を閉じる。

○現在・伊塚のマンション・杏菜の部屋（夜）

伊塚、杏菜のスマホの電源を入れる。

パスワード画面、文字を打ってみるが

わからない。諦めて、スマホを置く。

伊塚、パソコンの電源を入れる。

パスワード画面が出て。

伊塚「……」

諦めて、デスクの上を漁るが、それらしきものはない。

伊塚、備え付けのキャビネットに目を

留め、引き出しを上から開けていく。

一番下の引き出しには、書類用のファイルが十数冊詰められている。

伊塚、一冊取り出して開く。

中には、新聞記事の切り抜きがファイリングされている。社会面の特集記事や、書評、絵本作家のインタビュー記事など、無秩序に入っている。

伊塚、ばらばらとページをめくる。

と、手を止めて、

伊塚「……！」

伊塚、ある記事を凝視する。

『全国の子どもたちに笑顔を！児童養護施設を巡る大道芸人』という見出しに、ピエロの扮装をした中年男性がジ

ヤグリングを披露する様子を写した写真。その下には「大道芸人として二十年活動を続ける、浅香淳之介さん（40）」といったテキスト。

伊塚「（息を呑み）……」

○以下過去（22年前）・郊外の公園

こども祭りの日。輪投げやヨーヨー釣り、駄菓子屋の屋台など、子ども向けのお祭りが開かれている。

公園の中央、特設ステージの上、伊塚、シガーボックスを披露している。

ステージの下では、杏菜、音響を担当している。

伊塚、パフォーマンスを終え、ステージを下りる。

入れ違いで、ピエロの扮装をした浅香、ステージに上がり、ポールジャグリングを始める。

伊塚M「あの夜の後、先輩は、交際していたすべての女性たちとの関係を絶った」

× × ×
大道芸サークルの面々、子どもたちにバルーンアートを作ったり、道具を教えたりと交流している。

浅香、一際多くの子どもたちに囲まれ、ポールジャグリングを教えている。

伊塚M「先輩のそうした変化には、少なからず、あなたの存在が影響していた」

杏菜、カメラを構えて、
杏菜「みんなー、こっち向いてー」

浅香と子どもたち、カメラに向かってポーズをとる。

杏菜、シャッターを切る。
杏菜「はい、いいよー」

子どもたち、一斉に動き出す。
浅香「……」

浅香、杏菜を見つめている。
杏菜、気づき、見つめ返す。
少し離れて、伊塚、二人を見ていて、

伊塚「……」

○喫茶店・店内

伊塚、入ってくる。すでに席にいる杏菜を見つけて、向かいに座り、

伊塚「授業、今日はもう無し？」

杏菜「なーし」

伊塚「で、なに？話って」

杏菜「……うん」

杏菜、しおらしく俯いている。

伊塚「……」

杏菜「もし、私が、浅香さんのこと好きかもって言ったたら、直人、どう思う？」

伊塚「え？」

杏菜、顔を上げ、伊塚をじっと見る。

伊塚「……」

伊塚、目を逸らし、

伊塚「知らないよ。そんなの」

杏菜「……知らない？」

伊塚「うん。いや……」

杏菜、ふっと微笑んで、

杏菜「だよ。どうでもいいよね。直人には」

伊塚「いや、どうでもいいっていうか、」

杏菜「了解。お話終了」

伊塚「……そうだ、この前書いた小説、」

杏菜「あーごめん。まだ読めてないんだ」

伊塚「……ふーん」

杏菜「ごめんってー。へそ曲げない」

伊塚「はあ？曲げてませんけど」

杏菜「（笑い）はいはい」

伊塚「……」

○東蘭大学・空き地（夕）

大道芸サークルの面々、個人練習をしている。

伊塚と杏菜、揃ってやって来る。

伊塚・杏菜「お疲れさまです」

藤島、ディアボロを回しながら、

藤島「お疲れー」

伊塚と杏菜、道具の準備を始める。

藤島「そうだ。浅香さん、当分サークル出れないんだって」

伊塚「え、そうなんですか？」

藤島「なんかね、お兄さんが、突然亡くなっ
たとかで……」

杏菜「え」

藤島「お葬式とかいろいろあって、今、愛知
の実家に帰ってるって」

杏菜「そうなんですか……」

伊塚「……」

○伊塚と浅香のアパート・表（夜）

伊塚、帰ってくる。

アパートの前に救急車が停まっている。
担架で、ぐったりした様子の山岸が運
ばれていく。

伊塚「……！」

と、大家の仲手川譲二（60）、隣に
立って、

仲手川「山岸さん。階段の下で倒れてたみた
い。急性アルコール中毒だって」

伊塚「ええ……」

仲手川「伊塚君、部屋隣だったよね。いろい
ろ迷惑も多いんじゃない？」

伊塚「いや、特には……」

仲手川「山岸さんもね、一応ちゃんとした会
社に勤めてるんだけど。あの歳で独り身で、
酒ばっかになっちゃうのもわかるけどね」

伊塚「……はあ」

仲手川「ほんとかどうか知らないけど、ゲイ
だって噂もあるし」

伊塚「……」

仲手川「それはまあ、関係ないか」

伊塚「……そうですよ」

救急車が去っていく。

伊塚、呆然とそれを見つめる。

○東蘭大学・通路

伊塚、歩いている。

向かいから、藤島、やって来て、

藤島「あ、伊塚お疲れー」

伊塚「お疲れさまです」

藤島「浅香さん、戻ってきてるらしいんだけど、もう会った？」

伊塚「え、いや、まだ」

藤島「やっぱりなんか、落ちてるみたい。見たって子も、話しかけられなかったって」

伊塚「……そうですか」

藤島「もうちょいしたらさ、様子見に行っ

あげたら？伊塚アパート同じでしょ？」

伊塚「……はい」

○伊塚と浅香のアパート・伊塚の部屋（夕）

伊塚、携帯電話で杏菜にメールを打つ。

『浅香さん、帰ってきてるみたい。後で一緒に部屋行ってみない？』と。

○同・階段（夜）

伊塚、階段を下りている。

足を止め、携帯電話を見る。

受信ボックス、新着メールはない。

○同・一階通路（夜）

伊塚、階段を下りてくる。ふと見ると、一番奥の部屋の前、浅香と杏菜が向かい合い立っている。

伊塚「あ、」

声を出しかけて、固まる。

暗い目をした浅香に対し、杏菜、何か懸命に言いながら背中を擦っている。

伊塚、思わず階段へ戻り、隠れる。

伊塚「（動揺し）……」

階段から通路を覗く。

と、浅香、ふいに杏菜にキスをする。

伊塚「……！」

浅香、躊躇いを見せる杏菜を抱きしめ、我を失いキスをする。

やがて杏菜、諦めたように、浅香に身を委ねる。

見ていた伊塚、吐き気を起こし、逃げ

るように階段を駆け上る。

○同・二階通路（夜）

伊塚、部屋に向かって走る。

が、間に合わず嘔吐し、しゃがみ込む。

伊塚、苦しげに息をしていると、

山岸の声「おい」

伊塚、顔を上げる。

そこに山岸、立っている。手にはワン

カップ酒など入ったレジ袋。

山岸「大丈夫か？」

伊塚「……お構いなく」

山岸「あっそう」

山岸、ふらふらと部屋に向かっていく。

伊塚、その背中を見つめて、

伊塚「……あ、あの！」

山岸、立ち止まり、振り向いて、

山岸「なんだよ」

伊塚「……寂しい、からですか？」

山岸「……あ？」

伊塚「そうやって、飲むの、止められないの

は……一人が、寂しいからですか？」

山岸「なんだ。喧嘩売ってんのか？」

山岸、戻ってくる。

伊塚「今、そうやって一人なのは……誰かを、

愛した結果ですか？」

山岸「……」

伊塚「それとも、誰も……愛せなかったから

ですか？」

山岸「……さっきから、何言ってるんだよ」

伊塚「……」

山岸「よくわからんけど。お前みたいにはな

りたくないって、そう言いたいのか？」

伊塚「……なりたくありません」

山岸「（笑い）おう、言ったな？」

伊塚「……だって、一人になんか、なりたく

ない……一人で、歳を取るなんて、嫌だ」

山岸「……」

伊塚「……僕も、人の、何かになりたい」

伊塚、ほとんど泣きそう。

山岸「……どうでもいいけど。そのゲロ、自分で片せよ？」

山岸、去っていく。

伊塚「……」

○東蘭大学・部室棟・階段

伊塚、俯き、階段を上る。

○同・大道芸サークル部室

伊塚、入ってくる。

中を見て、扉の前で足を止める。

そこにいるのは浅香一人で。道具の手入れをしている。

浅香「（気づき）おー伊塚。今日は早いな」

伊塚「（顔を上げられず）……」

浅香「どうした。怖い顔して」

伊塚「（浅香を見て）……」

浅香「ん？」

伊塚「……杏菜に、会いました。聞きました」

浅香「……ああ」

伊塚「杏菜、泣いてました。傷ついてました

……全部、浅香さんのせいですよ？」

浅香「……」

伊塚「浅香さんが、したのは、不潔で、暴力で、許されることじゃないんです」

浅香「……」

伊塚「浅香さんは、その汚い手で、壊したんです。裏切ったんです。杏菜を」

浅香、伊塚をじっと見る。

伊塚、思わず目を逸らす。

浅香「……その通りだよ。最低だよな」

伊塚「……そうですよ」

浅香、道具を片付け立ち上がり、伊塚のほうに向かってくる。

伊塚「……でもまだ、間に合いますから。戻れますから……また、三人で、」

浅香、伊塚の前に立ち、

浅香「伊塚。ごめん」

浅香、伊塚をよけて出ていく。

伊塚「……」

伊塚 M 「先輩はこうして、私たちの前から去り、二度と姿を見せなかった」

○伊塚と浅香のアパート・浅香の部屋

何もない、がらんとした部屋。伊塚と杏菜、呆然と立ち尽くす。

○アパート近くの公園

住宅街にある、閑散とした小さな公園。

伊塚と杏菜、ベンチに座っている。

杏菜 「……浅香さん、お兄さんとはそんな、仲が良かったわけじゃないんだって」

伊塚 「（顔を見れず）……」

杏菜 「血も、繋がってなくて。浅香さんは、

お母さんの連れ子で」

伊塚 「……へえ」

杏菜 「私も、こないだ聞いただけなんだけど」

伊塚 「……」

杏菜 「お父さんはね、不動産の会社、経営してて。お兄さんはそこで、働いてて、」

伊塚 「だから、浅香さんは好き勝手できてたって、そういう話？」

杏菜 「……まあ」

伊塚 「なんだそれ（笑）小説でよくあるー」

杏菜 「（笑い）……」

伊塚 「……ねえ、杏菜」

伊塚、杏菜を見る。

杏菜、伊塚をまっすぐに見返す。

伊塚 「（言葉が出ず）……」

杏菜 「なに？」

伊塚、目を伏せて、

伊塚 「……なんでもない」

杏菜 「（笑い）あっそう」

杏菜、立ち上がり、

杏菜 「あーあ。いいなー。浅香さんみたいに

私もどっか行っちゃいたいなー」

伊塚 「……」

杏菜、一步二歩と伊塚から離れていく。

杏菜 「どこがいいかな……あ、フイレンツェとか」

伊塚「なんでよ、行かなくていいよ……」
杏菜「じゃあ直人も来ればー？ファイレンツェ。
ファイレンツェのドウオモで待ち合わせ。知
らない？『冷静と情熱のあいだ』」

伊塚「知らないよ、行かないでよ……」

杏菜、足を止める。

伊塚、堪らず立ち上がる。

伊塚「行かないでよ。杏菜はどこにも行か
ないで。ずっといてよ」

杏菜、背を向けたまま、俯いて、

杏菜「……なんでよ」

伊塚「（言葉が見つからない）……」

杏菜「直人に、そんなこと言う権利なくな
い？」

杏菜、行こうとする。

伊塚、焦り、逡巡し、

伊塚「……好きだ」

杏菜「……」

伊塚、足元を見つめて、

伊塚「……僕は、杏菜のことが、好きだ」

杏菜「……」

杏菜、伊塚に振り向く。

伊塚、顔を上げられない。杏菜の顔を
見ることができない。

○現在・新幹線・車内

伊塚、座席でパソコンを打っている。

車内の電光掲示板には『名古屋』到着
のアナウンスが流れている。

○公園・芝生広場

伊塚、芝生の上を歩く。

その先に、クラブジャグリングを一人
練習する男の姿が見える。

伊塚、男のもとに向かう。

男は、浅香（46）で。

浅香、伊塚に気づき、手を止める。

伊塚「……お久しぶりです。浅香さん」

浅香「おう。来たな。伊塚」

浅香、人懐こい笑顔を浮かべる。

伊塚、気まずく目を伏せる。

○同・園内

伊塚と浅香、歩いている。

浅香「驚いたよ。まさか有名な作家先生から、DMが届くなんて」

伊塚「知ってくれてたんですか。その、僕が小説を書いていること」

浅香「まあな。もちろん読みはしないけど」

伊塚「ああ（笑）」

浅香「それと……杏菜のことは、残念だよ」

伊塚「……」

伊塚、足を止める。

伊塚「……浅香さん」

浅香、足を止めて振り向く。

浅香「ん？」

伊塚「浅香さん、杏菜と、連絡は……」

浅香「いや？何も」

伊塚「え……」

浅香「お前らが結婚してることすら、メッセ

ージもらうまで知らなかったくらいだ」

伊塚「……」

浅香「なんだよ。その顔は」

伊塚「……杏菜は、浅香さんの記事を見つけて。なのに僕には、何も言わなかった」

浅香「……？」

伊塚「つまりそれは、一人で……僕に隠して

おきたかったんだと思っ……」

浅香「……なるほどな。でも、残念だったな。当てが外れて」

浅香、歩き出す。

伊塚「……」

○飲み屋（夜）

店外の席。伊塚と浅香、飲んでいる。

浅香「いやあ、しかし嬉しいよ。また伊塚と、こうして酒が飲める日が来るなんて」

伊塚「（曖昧に笑い）……」

伊塚、俯いて、

伊塚「……浅香さん。僕、ずっと、浅香さん

に謝りたくて」

浅香「謝る？」

伊塚「……あの日、最後に会ったとき、僕は浅香さんに嘘をついたんです」

浅香「……」

伊塚「杏菜が浅香さんに傷つけられたとか。本当はそんなことなかったんです……だって、杏菜は浅香さんのこと、」

浅香「お前のあれは、嘘なんかじゃないよ」

伊塚「……え？」

浅香「俺は確かに杏菜を傷つけた」

伊塚「……」

浅香「それと、あのときから、杏菜が好きで

いたのはお前だよ。伊塚」

伊塚「……いや、でも」

浅香「あの後すぐ、部屋で散々叱られたよ。

杏菜に」

伊塚「え？」

浅香「付き合ってもない、合意もないのにあ
あいうことをするのは、人間じゃありません。
ケダモノですってな」

浅香、遠い目で笑う。

伊塚「……」

浅香「俺も、もちろん反省して。泣いて謝つ
たよ……謝って許されることじゃないけど。
でも杏菜は、最後には笑ってくれた」

伊塚「……じゃあ」

浅香「だからまあな。伊塚のあれは嘘という
か、伊塚なりの何かがあるんだろうとは気
づいてたよ」

伊塚「じゃあ、それじゃあ浅香さん、突然い
なくなったりしたのは……」

浅香「（笑い）お前アホか。後輩に詰められ
たくらいで、大学辞めたりなんかするか」

伊塚「……」

浅香、酒を飲みながら、

浅香「兄貴が死んで。帰って来いって言われ
たんだよ、父親に。初めて頭下げられて」

伊塚「そうだったんですか……」

浅香「まあ。何も言わずに去ったほうが、か

「っ、こいいんじじゃないかと思ったのはある」
伊塚「（笑い）……じゃあ今は、会社を継いで？」

浅香「そのはずだったんだけどな。死んだ兄貴には一人娘がいて。そいつの旦那と会長、あ、俺の父親な？その二人が結託して。この前、会社を追い出されたんだよ」

伊塚「ええ……」

浅香「しまいには、妻と子どもにも出て行かれちゃって（笑）」

伊塚「……小説、みたいですね」

浅香「ん？」

伊塚「いや、なんでもないです」

浅香「まあだから、とりあえずはな、こっちの活動に身を捧げてるってわけ」

と、ジャグリングのクラブを出し、席を立てて芸を始める。

伊塚「……」

○同・前（路地裏（夜））

伊塚と浅香、店の会計を済ませ、通りに入る。

少し歩いて、伊塚、立ち止まる。

浅香、振り向いて、

浅香「なんだよ。またそんな顔して」

伊塚「（俯き）……」

浅香「伊塚？」

伊塚「……前に、話したことありますよね？」

僕が、恋とかそういうの、思わないって」

浅香「……ああ」

伊塚「僕は、結局そのことを、最後まで杏菜には打ち明けませんでした」

浅香「……」

伊塚「はじめは、なんとかかなると思ったんです。続けていけば、いつか……：：：そうならなくても、僕が、我慢をすればって」

浅香「うん」

伊塚「自分のそれに、名前が付いてること自体、知ったのは、結婚をして十年近くが経ってからで」

浅香「……そうか」

伊塚「でも、もう、言い出すことなんてできなかつた」

浅香「……」

伊塚「だって僕は、それだけの時間を……僕は以外なら、あげられたはずの幸せを……僕は杏菜から奪ってしまったから」

浅香「……だからか」

伊塚「え？」

浅香、歩き出す。伊塚もついて歩く。

浅香「だから杏菜は、お前じゃ満たせないものを、別の誰かに求めていたんじゃないかって？」

伊塚「……でも、本当にそうでも、僕には杏菜を責める資格なんてない」

浅香「……」

伊塚「僕は、杏菜を騙して、彼女の人生を、狂わせたから……」

浅香、足を止め、振り向いて、

浅香「やっぱり伊塚。お前はアホだな」

伊塚「……」

浅香「俺とのこともそうだけど。お前、騙したって。そんな嘘つく才能ないから」

伊塚「……」

浅香「それにな。他人の人生を自分が狂わせたなんて。そう思うのは傲慢の極みだ」

伊塚「……だけど、実際、」

浅香「少なくともな。あの頃の杏菜には、何通りもの選択肢があったんだ」

伊塚「……」

浅香「この二十年にも、杏菜には何度だって、自分の意志で、自分の道を決める余地があったんだよ」

伊塚「（こみ上げ）……」

浅香「それでも、その都度、お前といることを選んだのは、杏菜だ」

伊塚「……」

浅香「だから、杏菜が言うのでもない限り、お前が勝手に杏菜の人生悔いるなよ」

伊塚、足元を見つめ、堪えながら、

伊塚「……でも、やっぱり、思ってしまったんです。もしあのとき、杏菜に何かも打ち明けられてたら……もっと、別の関係を築けたかもしれない」

浅香「そんなの、」

伊塚「でも、その先で、杏菜が別の誰かと、僕の知らない、知れない道を行ったとして、僕はきっと、それを許せなかった。結局僕は、杏菜にただしがみついて、離そうとしなかった。それだけなんです……」

浅香「……」

○伊塚のマンション・伊塚の部屋

伊塚、パソコンに向かい、激しく打っている。

× × ×
(以下過去の場面)

高校、部室裏に座り込む伊塚を、路上から見下ろす杏菜。

× × ×
教室、伊塚から小説のノートを受け取り、「後で読むね」と微笑む杏菜。

× × ×
高校の帰り道、葉を「大事にする」と言い、空に透かして見る杏菜。

× × ×
ダイニングバーを出て、伊塚と浅香と並んで歩く杏菜。その横顔。

× × ×
公園、「好きだ」と言った伊塚に、振り向く杏菜。

× × ×
住宅街、並んで歩く伊塚(24)と杏菜(24)、結婚指輪をはめている。杏菜、伊塚の手を取り、指を絡ませる。程なくして、伊塚、その手を解く。

× × ×
夜、寝室、ベッドを出る伊塚。後ろには、横たわり肩を震わせる杏菜の背中。

スーパー、買い物をする伊塚（30）と杏菜（30）。二人の前を子連れの家族が過ぎていき、杏菜、切ない目で見つめる。伊塚、それに気づいている。× × ×
リビング、伊塚（42）、酒を飲んでいる。部屋の外からドンと物音がして。× × ×
伊塚、杏菜の部屋のドアを開ける。杏菜（42）、床でうずくまっている。伊塚、杏菜の背に手を伸ばす。と、杏菜、伊塚の手を払う。伊塚、動揺しながら、そこにあつた杏菜のスマホで通報する。× × ×
戻って、現在。伊塚、パソコンを打つ手を止めて。哀しく、天を仰ぐ。

○都内・ターミナル駅近く

伊塚、人を待っている。

駅から、香澄と莉乃、やって来る。

伊塚「……どうも」

香澄「どうも。すみません。急に無理を言っ
てしまつて」

伊塚「いえ、そんな……なんなら、僕のほう

から伺つてもよかつたのに」

香澄「まさか。娘のわがままですから」

莉乃「えー、お母さんだつて、久しぶりに東

京で買い物できるつて喜んでたくせにー」

香澄「もう。余計なこと言わない」

伊塚「（苦笑し）……」

香澄「じゃあ、よろしく願ひします」

伊塚「あ、あの」

香澄「はい？」

伊塚「大丈夫ですかね？……パパ活とか、疑
われたりしないですかね」

香澄「え？」

伊塚「いや、なんていうか、僕、父親然とし
た振る舞いとかできないですし、だから、
香澄と莉乃、笑い出す。

香澄「大丈夫です大丈夫です。まあ、今みたいにキョドらなければですけど」

伊塚「（恥ずかしく）……ですよね」

香澄「何かあったら連絡ください。莉乃もね、良い子にしないね」

莉乃「もー。ちっちゃい子じゃないんだから」

香澄「（笑い）じゃあ、お願いします」

香澄、伊塚に頭を下げ、去っていく。

莉乃「あ、一個行きたいところあるんですけど。いいですか？」

伊塚「ああ。うん……」

○大型書店・店内

小説コーナー、莉乃、書棚を物色する。

伊塚、少し離れて見守っている。

と、莉乃、本を手に取り開いて、真剣な眼差しで文を追う。

伊塚「……」

莉乃の立ち姿に、杏菜（16）の姿が重なって。

伊塚、目を逸らす。

○喫茶店・店内

テーブル席、伊塚、五十枚ほどの原稿を読み込んでいる。

向かいに座っている莉乃、本を開きながら伊塚の動向を気にしている。

伊塚、読み終えて、色ペンを出し、

伊塚「これ、書きちゃってもいいかな？」

莉乃「あ、はい」

伊塚、原稿の枠外に文を書きこむ。

莉乃「（じっと見つめて）……」

伊塚、ペンを置き、原稿を揃えて、伊塚「はい。読ませてくれてありがとう」

と、莉乃に手渡す。

莉乃「ありがとうございます」

伊塚「まあ、アドバイスっていうか感想、そ

こにも書いたけど。よく書けてると思うよ」

莉乃「……ほんとですか？」

伊塚「うん。普通に面白い」

莉乃、肩を落として、
莉乃「なんだー、普通かー」

伊塚「ああいや、普通っていうのは……」

伊塚、何かがよぎって、思わずふっと
笑ってしまう。

莉乃「おじさん？」

伊塚「ごめんごめん。でも考えてみて？一応
僕だって、プロの作家なんだよ？その僕が
言う普通は、才能ありってことだから」

莉乃「（満更でもなく）……はあ」

伊塚「ああでも……登場人物の心情の描写は、
僕以外の人に聞いたほうがいいかも」

莉乃「え？」

伊塚「これは、恋愛小説だと思うけど。僕は
あんまり、読むのも書くのも、得意ではな
いから」

莉乃「……そうなんですか？」

伊塚「ごめんね。プロの作家だとか威張って
おいて」

莉乃「いえ……でも、一つだけ、質問しても
いいですか？」

伊塚「うん」

莉乃「おじさんにとって、恋愛小説と、愛小
説って、違うものなんですか？」

伊塚「……愛、小説？」

莉乃「はい。杏菜さんが言っていました。おじ
さんの書く小説は、愛小説なんだって」

伊塚「杏菜が……」

莉乃「昔から杏菜さん、会うときはいつも、
おじさんの新作を持ってきてくれて。あ、
お母さんはおじさんのことあんまり好きじ
ゃないから。私と二人で会うときね」

伊塚「（笑い）……」

莉乃「それで、杏菜さん、自慢するみたいに
言うんです。直人君は、恋愛小説は書かな
いけど、愛を書く作家なんだよって」

伊塚「……」

莉乃「直人君は昔から、そういう人だから。
小説にもそれが滲み出てるんだって」

伊塚、かぶりを振って、

伊塚「そんなわけないよ……」

莉乃「……？」

伊塚「そんなはずないんだよ……少なくとも、杏菜が、そう思えるはずがないんだ」

莉乃「どうしてですか？」

伊塚「だって、だって僕は、杏菜に……」

伊塚、言葉が続かない。

莉乃「……そうだ。杏菜さんからは内緒って言われてたんですけど。おじさん、よく部屋のリソファで居眠りするんでしょ？」

伊塚「……え？」

莉乃「そういうとき、杏菜さん、いつも気づかれないように、肩をくつつけるんだって」

伊塚「……」

莉乃「そうやってね、愛を受け取るんだって」

伊塚「……なんだそれ」

莉乃「（笑い）ね、変だよ。おじさん、ただ寝てるだけだし」

伊塚「……」

莉乃「でも杏菜さん、私がつどり着いた境地なのって。なんか、笑ってました」

伊塚「（戸惑い）……」

○ターミナル駅・前

莉乃、路上ミュージシャンの歌を聞いている。

伊塚と香澄、少し離れたところで、莉乃を見守りながら、

香澄「……この前は、無神経なことを言って、すみませんでした」

伊塚「いや……」

香澄「誤解しないでほしいのは、直人さんのこと、お姉ちゃんが悪く言ってたわけじゃないんです」

伊塚「……」

香澄「あれは私が、私の尺度で、勝手にそう思ってただけで……」

伊塚「いや、僕は……僕は、責められても仕方がないんです」

香澄「だから、そんなこと、」

伊塚「違うんです、僕は……僕の、杏菜への
それに、想い方に、一人で負い目を感じて、
自信を持つことができなかった」

香澄「……？」

伊塚「それが、僕の過ちです。僕が後悔すべ
きなものは、そのことだったんです」

香澄「……」

路上ミュージシャンはラブソングを歌
っている。「愛してる愛してる」など
と、クサイ歌詞を熱唱している。

香澄「……直人さん、お姉ちゃんのこと書く
んですか？」

伊塚「……すみません」

香澄「違うんです。いいんです……それ読む
の、楽しみにしてますね」

伊塚「……はい」

香澄、小さく頷き、

香澄「……あの子、いつまで聞いてんだろ
と、行こうとする。」

伊塚「あ、あの」

香澄「はい？」

伊塚「杏菜のことで、一つ、聞きたいことが」

香澄「……何ですか？」

伊塚、思いを巡らせて、

伊塚「……いや、やっぱり」

香澄「え？」

伊塚「うん、いいです。もう、大丈夫です」

伊塚、さっぱりした顔で笑う。

○伊塚のマンション・リビング

ソファの上、伊塚、本を片手に居眠り
をしている。

その肩に、別の肩が触れる。

杏菜（42）、伊塚に寄り添い、目を
閉じて穏やかに微笑んでいる。

伊塚、何かを感じたように、目を閉じ
たまま小さく微笑む。

○喫茶店・店内

T・一年後

伊塚、大友から取材を受けている。
北原と宮木も同席している。
テーブルの上には、伊塚の著書『愛小説』の単行本。

大友「今回の作品を発表する際、伊塚さんはご自身が、対人において性的な惹かれを感じないアセクシユアルであり、また、恋愛感情を持たないアロマンティックでもあることをカミングアウトされています」

伊塚「はい。そうですね」
大友「差し支えなければ、今回、そうした公表をするに至った理由をお聞かせいただけませんか」

伊塚「はい：：それはやはり、この作品が私小説であると銘打っているからです」

大友「（前のめりで）ええ、ええ」
伊塚「読者の中には、ここに出てくる『私』の若かりし日の感情について、それは恋だと言う人もいるでしょう」

大友「ええたしかに。そう捉える人は少ないと思います」

伊塚「ですが、実際はそうではないんです。そうではないことが確かにあつて。その証明の難しさゆえ、自分を偽らざるを得ない人、何かを諦めてしまう人、言葉にできない苦しみを抱え続けてしまう人がいる」

大友「：：」
伊塚「一つ、大事な前置きをしておきますがこの『私』の内面は、『私』だけのものです。『私』は、アセクシユアルであり、アロマンティックでもあります、性的惹かれと恋愛感情は別のものですし、たとえば同じアセクシユアルという指向の中にも、グラデーションがある。つまり、僕が書いたものを、別の誰かのそれに当てはめることはしないしてほしいということですよ」

大友「なるほど。大事なことですね：：」
伊塚「そのうえで、この小説の発表と、僕自身について知ってもらうことは、小さくとも、意味のあることだと思っただけです」

宮木「あ、カメラを構えて、
う感じで。そうですそうす
伊塚、ぎこちなくポーズをとっている。
少し離れたところで、北原、笑いな
ら眺めている。その手には『愛小説』
を抱えていて。
本の間から、何かが落ちる。
隣にいた大友、拾って、
大友「落としましたよ」
と、北原に差し出す。
それは、プラスチック製の透明な葉で。
北原「あすみません」
北原、受け取って、葉を本に挟む。
ふと視線を感じて。伊塚と目が合う。
伊塚、北原から視線を外す。
北原「……」
伊塚M「あなたが隠した空白の日を、私はつ
いぞ知れなかった」

○伊塚のマンション・杏菜の部屋

本棚の前、伊塚、『愛小説』のページ
をめくる。
伊塚M「知らなくても、いいと思った」
伊塚、本を閉じ、棚に収納する。
そこには、十数冊の伊塚の著書が並ぶ。
伊塚M「ともあれ、あなたは私といることを、
選び続けてくれていた」

○同・リビング

伊塚、穏やかな目で、壁に飾られた杏
菜の写真を見つめる。
伊塚M「そのためにあなたが必要とした時を、
私が暴くことに意味などないのだ」
伊塚、ソファの端に腰を下ろして。瞼
を閉じる。
カーテン越しに差し込んだ陽が、伊塚
の肩を優しく撫でる。

終わり

【参考資料】

「ACE アセクシユアルから見たセックスと社会のこと」アンジェラ・チェン著、羽生有希訳（ハは旧字体）

「見えない性的指向 アセクシユアルのすべて」ジュリー・ソンドラ・デッカー著、上田勢子訳

「アセクシユアル アロマンティック入門 性的惹かれや恋愛感情を持たない人たち」松浦優著

「大学で究める学問発見サイト 夢ナビ 同じ景色を見ている時、私たちは本当に同じものを見ているの？」

（ <https://yumenavi.info/vue/lecture.html?gnkcd=g010887> ）

【引用】

作品引用…映画「風と共に去りぬ」ヴィクタ
ー・フレミング監督、小説「冷静と情熱の
あいだ Rosso」江國香織著、「斜陽」太宰
治著

作家名引用…江國香織、角田光代、太宰治、
山田詠美、山本文緒